

第2章 調査結果の要約

1 定住性

(1) 「普段の買い物が便利である」と感じている人は7割台半ば

居住地域の評価については、〈普段の買い物が便利である〉〈通勤や通学などの交通の便がよい〉〈快適で安全なまちである〉〈景観・街並みが良好である〉の4項目で、肯定的評価（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）が半数を超えて高い評価となっている。

また、居住地域の状況について経年変化で聴取した設問では、〈ペットのふん〉と〈ゴミやタバコのポイ捨て〉で【減っている】（「明らかに減っている」＋「どちらかといえば減っている」）がともに半数以上を占めており、前回5割に届かなかった〈ペットのふん〉では、【減っている】が前回の令和元年調査に比べて4.2ポイント増加して5割台に戻した。

一方、居住地域の評価のうち、前回から〈自転車利用者の交通ルール、走行マナーが良いと感じる〉に表現をかえて否定的な評価（「どちらかといえばそう思わない」＋「そう思わない」）が7割弱と多かった項目の評価も、今回はやや改善されたが、肯定的な評価はまだ3割にとどまることから、引き続き、区民の交通マナー意識の向上が求められる。また、全体では肯定的評価が7割弱を占めた〈通勤や通学などの交通の便が良い〉を地域別にみると、第1地域と第6地域の両地域で9割弱と高い一方で、第8地域と第10地域の2地域では肯定的評価が5割以下にとどまり、引き続き地域差が顕著になっている。

(2) 「暮らしやすい」は4年連続で8割強

地域の暮らしやすさへの評価をみると、【暮らしやすい】（「暮らしやすい」＋「どちらかといえば暮らしやすい」）との評価は、全体で8割強と例年と同様の高い水準となっているが、これを地域別にみると、第3地域、第8地域、第14地域などでは他地域に比べて低くなっており、この3地域では【暮らしにくい】との否定的な評価が2割強～2割台半ばとなっている。

【暮らしにくい】（「暮らしにくい」＋「どちらかといえば暮らしにくい」）と回答した人に、特に暮らしにくいと感じることを聴いた結果は、「住民のマナーやルールを守ろうとする意識が低いこと」が4割台半ばで最も高く、これに「交通の便が悪いこと」が4割強で続き、この2項目がこれまでの例年と同様に、上位となっている。

(3) 定住意向がある人は、前回と同じく8割弱

【定住意向】（「ずっと住み続けたい」＋「当分は住み続けたい」）は8割弱と、例年と同様の高い水準を示しており、地域別にみても、全15地域で7割以上となっている。

居住地域の利便性や快適性、美化意識の向上は肯定的にとらえられ、全体としての暮らしやすさへの評価や定住意向は、高い水準を維持している。しかしながら、〈マナー意識の低さ〉や一部の地域では〈交通の便の悪さ〉、〈買い物のしにくさ〉などが感じられており、それらが暮らしやすさへの評価が低い水準にとどまっている要因のひとつと推察される。

(4) 今後の課題

今後は、これらの地域差の解消を図るとともに、住民のマナー意識の啓発など、各種の取り組みを一層強化し、暮らしやすさへの評価をさらに向上させることによって、区民の定住意向をより強めていくことが必要となろう。

2 大震災などの災害への備え

東日本大震災から約9年半が経過した令和2年調査時における、区民の防災意識や日頃の備えはどのようになっているのだろうか。

(1) 家庭備蓄をしている人はほぼ4人に3人の割合

食料の備蓄や防災用具、買い置きなどの用意については、【備蓄・買い置きあり】（「災害に備えて食料の備蓄や防災用具などを用意している」＋「特に災害対策としてではないが、一定量の飲食物などの買い置きはある」）は、今回は73.3%と、令和元年調査結果（66.4%）より約7ポイント伸びて、震災半年後の平成23年調査結果（73.6%）とほぼ同レベルの水準まで比率が増加している。このように、震災2年後以降から続いていた家庭備蓄にみる区民の防災への意識低減の状況は、今回、改善の傾向がみられたが、日頃からの区民の防災意識を高めていく取り組みの必要性は変わっていないものと考えられる。

(2) 備蓄や防災用具、買い置きなどの内容では、「水」が8割台半ば、「あかり」「食料」が8割

備蓄や防災用具、買い置きなどの内容としては、「水」「あかり」「食料」が8割から8割台半ばと高くなっているのに対して、「医薬品」は4割台半ば、「水の確保用品」や「簡易トイレ」などは2割台にとどまっており、備蓄内容に大きな差がある状況に変化はみられない。

また、水と食料の備蓄量については、「1日分以上3日分未満」が「水」と「食料」とともに4割強から4割台半ばと多くなっているのに対し、「1週間分以上」は「水」と「食料」とともに1割強にとどまっている。

この結果は、例年の調査結果とほぼ同様であり、今後も、医薬品やトイレをはじめとして、備蓄内容をより充実させるとともに、水や食料の備蓄量についても、国の「最低3日分、できれば1週間分」という目標に少しでも近づくよう、引き続き区民の取り組みを促進していくことが重要である。

さらに、災害時の水や食料の確保については、「通常どおりスーパーなどで購入する」（33.3%）が前回より増加して3割台前半で最も多く、前回から新設した「避難所でもらう」（17.4%）も2割弱で、「考えていない」という人がこれまでより約10ポイント減少して3割となっている。

このように、これまでの、震災直後に比べて区民の防災への危機意識が低下しつつあった状況には改善の傾向がみられて、災害発生時の水や食料の確保に関する意識にも変化の兆しがうかがえるこの機会を好機と捉えて、日頃から災害への備えをしてもらうよう、今後も継続的に啓発していくことが重要である。

(3) 転倒・落下・移動防止対策をしている家具類は少ない・対策を行っていないが7割

家具類の転倒・落下・移動防止対策については、【対策実施・多い】（「すべての家具類に対策を行っている」＋「対策をしている家具類が多い」）は27.0%と、前回（26.7%）とほぼ同様となっており、平成25年以降8年間にわたって3割弱のまま推移している。

また、全体の7割を占める【少ない・行っていない】（「対策をしている家具類は少ない」＋「対策を行っていない」）人たちのその理由としては、例年同様「面倒である」が3割弱で、「室内に危険性のある家具類がないため不要である」を僅かに上回って最も高くなっており、引き続き家具類の転倒・落下・移動の危険性を区民に啓発していく必要がある。

(4) 避難場所について、自分の地域の避難場所を知っている人は、4割弱

今回の令和2年調査から、3種の避難場所の<意味>と<場所>を聴取する形式に設問方法を変更した「避難場所」に関する結果をみると、「知っている」は【避難場所<地域の場所>】が36.9%で最も高く、区民の認知浸透度は【避難場所】>【一時集合場所】>【第一次避難所】の順となっており、引き続き、「あだち防災マップ&ガイド」や「あだち広報」、スマートフォン対応アプリ「足立区防災ナビ」等のさまざまな情報媒体を活用して、区民の【3種の避難場所】についての<意味>と<地域の場所>の認知浸透度をさらに向上させていく必要がある。

(5) 大規模災害時の避難生活場所は「避難所」が4割台半ばで最多ながら、前回より10ポイント近く減少して、「別居の家族や親戚の家」が3割弱に増加

区民の半数近くが、大規模災害時に自宅に住めなくなった場合に避難生活を送る場所として「避難所」を想定していることを踏まえて、避難所における良好な生活環境の確保に力を入れていくことは引き続き重要なが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けて、「避難所」を避ける傾向も窺えることから、避難所における感染拡大防止対応など、新たな生活様式に備えた工夫や対策も必要である。

(6) 大地震の際の防災対策で区に力を入れてほしいこととして、「衛生対策の充実」「水・食料の備蓄の充実」「ライフライン確保」が6割弱で並んで上位

大地震の際の防災対策として区に力を入れてほしいこととしては、「非常用トイレの確保など衛生対策の充実」「水・食料の備蓄の充実」「ライフラインやエネルギーの確保」の3項目が、いずれも6割弱の僅差で並んで上位3位を占めるという回答傾向に今回も変化はみられず、今後もこれらの分野への取り組みを推進する必要がある。

3 洪水対策

令和元年台風第19号により、河川氾濫の危険が高まり、区内全域に避難勧告を発令した。この経験による区民の水害への意識の変化はみられるのだろうか。

(1) 「足立区洪水ハザードマップ」を見たことがある人は8割台半ばで、5年続けて確実に上昇『足立区洪水ハザードマップ』を【見たことがある】(「見て、自宅の浸水深を確認した」＋「見て、内容は確認した」＋「見たが、内容までは覚えていない」)は今回84.7%と、前回の78.6%より6.1ポイントも増加して、初めて聴取した平成27年の52.8%以降、各年順調に伸びている。また、今回新たに選択肢を細分化した「見て、自宅の浸水深を確認した」(26.5%)も2割台半ばを占め、僅かながら「見て、内容は確認した」(24.3%)を上回っている。よって、「そのような地図は見たことがない」という人は1割強まで減ったものの、今後も、このマップの存在を広く区民に周知して、自宅の浸水深を確認してもらうなど、起こり得る水害への理解を深めてもらうことが重要である。

(2) 河川はん濫時の避難場所を事前に決めている人が8割弱と多いが、事前に決めている人の3人に2人が「自宅にとどまる」と回答

河川はん濫する恐れがある場合の避難する場所を事前に決めている人は77.0%と多いが、決めていると回答した人の避難場所では、「自宅にとどまる(自宅内の高い階への移動を含む)」(65.8%)が6割台半ばを占め、次点の「近隣の小・中学校など区が開設する水害時の避難所」(18.7%)を大きく上回っている。一方、全体の2割強に相当する、避難場所を事前に決めていない人の主な理由では「避難する場所がわからないから」(43.9%)が4割台半ばを占めて多くなっている。

(3) 河川はん濫時の対処として「避難する」の割合が高いのは、〈区から避難勧告・指示が発令されたとき〉と〈自宅付近が浸水したとき〉がともに6割台前半で上位

河川はん濫し、数メートルの浸水被害になるような大洪水が迫っていると仮定した場合の対処について、「避難する」の割合が高い順にみると、〈区から避難勧告・指示が発令されたとき〉が64.1%と最も高いものの、前回より約14ポイント減少し、逆に前回より約10ポイント増加した〈自宅付近が浸水したとき〉が僅差の62.0%で続き、以下、新設の〈区から避難準備・高齢者等避難開始が発令されたとき〉で38.2%、〈近所の人々が避難をしているのを見たとき〉で36.8%、〈数時間後に暴風雨で外出できなくなると見込まれたとき〉で25.8%、〈足立区に大雨・洪水警報が出たとき〉で24.1%の順で続いている。

(4) 今後の課題

今後も、『足立区洪水ハザードマップ』の内容理解の一層の向上と認知度の更なるアップを図るとともに、荒川の大規模水害から命を守るための早めの広域避難や自宅近くの避難所開設場所の広報など、洪水が迫っている場合に、浸水する自宅にとどまるつもりの人が多い区民が適切に対処できるよう、幅広い支援を行っていくことが課題である。

4 区の情報発信のあり方

(1) 区の情報入手手段として、「あだち広報」が7割弱で、変わらずに首位

区に関する情報の入手手段としては、「あだち広報」が今回68.9%と、平成25年の調査結果(79.7%)からはやや漸減傾向にあるものの、依然として高い水準を維持してトップにある。一方、前回33.4%で次点だった「インターネット(区のホームページ、A-メール、ツイッター、フェイスブック)」は、今回より内訳4種の選択肢に細分化されて比率が分散したが、4種のいずれかを回答した割合を算出すると42.7%であり、電子媒体(インターネット)による情報の入手が前回より約10ポイント増加しており、電子による情報発信の需要がさらに高まっていることがわかる。トップの「あだち広報」の次点には「ときめき」(32.4%)が入り、以下「区のホームページ」(29.4%)、「町会・自治会の掲示板・回覧板」(28.7%)、「テレビ、ラジオ」(24.3%)、「A-メール」(19.6%)などが続いて上位となっている。性・年代別にみると、「あだち広報」および「ときめき」や「町会・自治会の掲示板・回覧板」の紙媒体は、男女ともに60代以上の高齢層で高くなっているのに対して、「区のホームページ」と「A-メール」は、男女ともに30代から50代の年代層で多く利用されている。

こうした状況を踏まえて、今後も「あだち広報」や「ときめき」、「町会・自治会の掲示板・回覧板」のような紙媒体の重要性を認識し、その内容の一層の充実を図るとともに、インターネットを利用して「区のホームページ」や「A-メール」などから自ら積極的に情報を得ようとする区民に対し、適切な媒体で適切な情報を発信していくことが必要である。

(2) 重要と考える区の情報として、「災害や気象」と「健康や福祉」が6割強で並んで上位

区が発信する情報で重要と考えるのは、「災害や気象に関する情報」(63.4%)と「健診や生活支援など健康や福祉に関する情報」(61.3%)が6割強で並んで上位2項目となっており、以下「国保・年金・税などに関する届出や証明に関する情報」が52.8%で続き、概ね例年と同様な結果となっている。この結果を性・年代別にみると、「出産や育児、就学など子どもや教育に関する情報」が男女ともに30代(男性42.9%、女性62.5%)でとくに高くなっている。

(3) 必要な時に必要とする区の情報「得られている」が前回より微増して7割台半ば

区の情報「必要なときに得られているか」を聞いたところ、【得られている】(「十分に得られている」+「ある程度得られている」)は、今回73.9%で、経年比較でみると、平成25年の60.5%から10ポイント以上増加している。一方、【得られない】(「得られないことが多い」+「まったく得られない」)は、平成25年の17.3%から、今回12.5%と漸減傾向にあり、これらの結果から、区民への情報提供は、徐々にではあるが確実に進んでいる様子が窺える。

しかしながら、依然として区民の1割強は、必要なときに区の情報【得られない】と答えており、その主な理由としては、「情報の探し方がわからない」(29.4%)と「情報が探しにくい」(25.2%)の2項目がそれぞれ2割台後半で多くなっている。

(4) 今後の課題

今後も、区からの情報が必要な時に【得られている】という層を更に増やし、【得られない】という層を減らしていくためには、多角的かつ効果的に行政情報を届けることが求められる。

なお、「区の情報に関心が無い」と答えた人も依然として少数(4.4%)ながら存在するため、このような区民にどのように関心をもってもらうかも、引き続き今後の課題となろう。

5 健康

(1) 区のキャッチフレーズを「知っている」はほぼ4割

『あだちベジタベライフ～そうだ、野菜を食べよう～』について、「内容まで知っている」が10.7%で、これに「詳しくは知らないが、言葉は聞いたことがある」を合わせた【知っている】は39.6%で、「知らない（初めて聞いた）」が58.3%となっている。経年でみると、今回の【知っている】(39.6%)は、平成28年調査の30.6%からは9.0ポイント増加しており、健康な生活を送るうえでの野菜摂取の重要性についての認識は、区民の間に徐々に浸透してきている様子が窺える。

しかしながら、性・年代別にみると、【知っている】は、女性の30代と40代及び60代と70歳以上ではそれぞれ5割以上と高い一方で、男性の20代から50代の若中年層および女性の20代では2割から3割弱と低くなっている。このように、区民の認知度には性別、年代による差があることから、区のキャッチフレーズの周知活動を一層推進していくことが重要である。

(2) 糖尿病の進行による病気や障がいとして知っているものとして、「失明」と「足の壊疽」が6割台で上位

糖尿病が進行するとあらわれる病気や障がいで“知っているもの”についての結果は、“そう思うもの”で聴取していた前回までの数年の回答傾向と同様に、今回も「失明」「足の壊疽（えそ）」「人工透析」「口の渇き」などが高くなっているものの、「神経障がい（手足のしびれ）」や「網膜症」のような《重篤な合併症の兆候》を示すものについては、依然として2割台半ばから3割弱程度にとどまっている。

(3) 野菜から「食べている」人は6割台半ば

糖尿病の予防には、“食事の際に野菜から食べ始めることが効果的である”と言われていたことに対し、「(野菜から)食べている」という人は64.8%を占めており、経年でみると平成28年の64.7%からほぼ横ばい状態となっている。

また、野菜の摂取量については、“1日350g以上”が目標とされているが、実際に【できている】(「できている」+「だいたいできている」)は、今回40.3%であり、平成25年以降各年4割前後と大きな変化はみられない。

今後も、糖尿病が進行するとあらわれる病気や障がいについて、継続して区民の理解を深めていくとともに、あらゆる性別、年代の区民に対し、糖尿病予防における野菜摂取の重要性を一層周知していくことが重要である。

(4) 自分は「健康である」と自認している人はほぼ7割

健康維持のために実行している、心がけていることとしては、平成25年以降、「毎日朝ごはんを食べている」と「毎年健康診断を受けている」がともに6割台で高くなっている。今後も、健康づくりのために、区民に対して、食生活の改善、運動の実践、各種健診・検診の受診等に取り組んでいくよう促していくことが必要である。

また、前回の令和元年調査より4段階評定で聴取している「自身の健康状態」の結果をみると、「健康な方だと思う」(63.2%)が6割強を占めて多く、これに「非常に健康だと思う」(5.8%)を合わせた【健康である】が69.1%とほぼ7割に達している。一方、【健康ではない】(「あまり健康ではない」+「健康ではない」)と感じている人は、29.9%とほぼ3割となっており、性・年代別では、男性の50代がほぼ4割と高いのを筆頭に、男性の30代と50代では、同年代の女性より10ポイント前後高く、性差が大きくなっている。

なお、平成25年から今回令和2年までを経年的にみると、喫煙率が減少し、運動習慣がない人の割合も減少、一方、主観的な健康観は上昇し、健診受診率も高まっている様子が窺え、あだちベジタベライフの取組みが、こうした生活習慣等に良い影響を与えていると推測できる。

(5) この一年間のがん検診の受診率は4割弱で、受診率は、乳がん検診や子宮頸がん検診が中核の女性が4割台半ばで、大腸がん検診や胃がん検診が中心の男性の3割弱より高い

今回の令和2年調査からの聴取となる、この1年間のがん検診の受診状況をみると、「受けた」が38.3%、「受けていない」が59.5%となっているが、「受けた」は性別では女性(46.5%)が男性(28.2%)を約18ポイント上回って高い。受けた人のがん検診の種類をみると、女性は、年代では30代から60代を中心に、「乳がん検診」(56.9%)と「子宮頸がん検診」(52.5%)がともに5割を超えて高く、男性は、年代では60代と70歳以上を中心に、「大腸がん検診」(62.2%)と「胃がん検診」(55.3%)が6割前後と高くなっている。なお、区民のがん検診受診率が4割に届かない現状を考えると、今後も引き続き、区民ががん検診を受けやすい環境を整備し、受診率の向上を図っていくことが重要であると考えられる。

(6) 感染症予防として「日常的に手洗いを実践している」人が8割台半ばで、1割強の“汚れたときは実践”を合わせた【実践している】は9割台半ばを超えている

今回の令和2年調査から聴取した、日頃からの感染症予防としての手洗いの実践状況の結果は、「日常的に手洗いを実践している」が86.0%を占めて多く、これに「汚れたときは手洗いを実践している」(10.8%)を合わせた【実践している】(96.7%)は9割台半ばを超えており、「日常的に手洗いを実践している」は男性(78.4%)より女性(91.9%)の方が高い。

(7) 「ゲートキーパー」という言葉を「知らない(初めて聞いた)」が8割台半ば

前回の令和元年調査から聴取している「ゲートキーパー」という言葉の認知状況は、「内容まで知っている」が2.3%、「詳しくは知らないが、言葉は聞いたことがある」が13.4%で、これらを合わせた【知っている】は15.7%で前回(14.1%)より微増しているが、「知らない(初めて聞いた)」(83.6%)が前回(83.5%)同様に8割以上を占めて多い。

6 スポーツ・読書

(1) 日常的に運動・スポーツは「していない」という人が4割弱

日常的な運動・スポーツの実施状況をみると、「30分以上の運動を週2回以上」(21.6%)が2割強で、以下「年に数回(時間は問わない)までを含めた【運動している】(59.1%)はほぼ6割に達するものの、「運動・スポーツはしていない」(37.9%)も4割弱を占めている。【運動している】は2年続けて微増しているものの、ほぼ前回までと類似した回答分布となっている。性・年代別にみると、「30分以上の運動を週2回以上」している人は、男女ともに20代と70歳以上の若年と高齢の計4層でそれぞれ2割台半ばから3割弱と他の年代よりやや高くなっている。

(2) 継続的に実施している運動・スポーツは「ウォーキング」が5割強で突出

【運動している】と回答した人に、継続的に実施している運動・スポーツを聞いた結果は、「ウォーキング」が51.1%で最も高く、これに「健康体操(エアロビクス・リズム体操・ストレッチなど)」(24.8%)と「筋力トレーニング」(20.8%)が2割台半ばと2割強で続いて上位となっている。

この結果を、性・年代別にみると、「ウォーキング」は男性の60代と70歳以上でともに6割台後半と高く、「健康体操」は女性の50代で4割台半ばと最も高いものの、女性の20代、40代、70歳以上の3年代層もそれぞれ3割強から3割台半ばで続き、「筋力トレーニング」は男女の20代でともに4割台半ば以上と高くなっている。また、選択肢を一部変更した運動・スポーツの実施場所については、これまで同様「自宅周辺」(56.1%)と「自宅」(37.1%)が、これまでより比率を伸ばして上位となっている。

これらの結果から、男女ともに高齢層中心に、若年層も加わった幅広い年齢層で、継続的かつ定期的な運動の重要性がより強く認識されるようになり、自宅を含む周辺地域で気軽にできる運動が好まれる傾向が定着化しつつあると推察される。

(3) していない人が運動・スポーツを行うためのきっかけの上位は、“身近な場所でできる”と“手軽な価格で利用できる施設”の2項目

日常的に「運動・スポーツをしていない」人に、どのようなきっかけがあれば運動・スポーツを行いたいと思うかを選んでもらった結果は、「身近な場所で運動・スポーツができる」(35.9%)、「手軽な価格で施設を利用できる」(31.3%)、「レベルを気にせず参加できる機会がある」(21.8%)などが上位で、これらの項目は男性より女性の方が高めとなっている。

(4) 東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた区の取り組みで関心があることとして、「交通網・交通インフラの整備」が2割で最多も、各年増加の「特にない」が4割に達する

来年に延期された東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた区の取り組みで関心があることでは、「交通網・交通インフラの整備」が20.0%で最も高く、以下「会場外での観戦(パブリックビューイングなど)」(13.5%)、「選手の育成や支援」(10.5%)が上位で、この設問を初めて聞いた平成28年には17.8%で次点だった「会場での応援活動」は漸減傾向を続け、今回は8.5%で7番目となっている。一方、平成28年の29.4%から各年漸増傾向を続ける「特にない」は今回40.1%となっている。

(5) 新たに始めたいスポーツ、文化、ボランティア活動について、始めたい活動がある人は2割弱みられるも、「ない」人が7割強と多数

オリンピック・パラリンピックに向けて、新たに始めたいスポーツ、文化、ボランティア活動の有無について、「ある」と回答した人は、前回より1.3ポイント増の17.5%と2割弱で、「今までの活動を継続」と回答した人も前回より1.6ポイント増の7.3%となっている。一方、新たに始めたい活動は「ない」と回答した人は、前回より3.0ポイント減の71.3%で、依然7割以上を占めている。性・年代別にみると、「ある」との回答は、女性の30代の4割弱をピークに山型の分布で年代差が大きめとなっているが、男性では1割未満の70歳以上を除くと、20代～60代は2割弱から2割程度で並んでおり、年代差はほとんどみられない。

新たに始めたい活動が「ある」、または「今までの活動を継続」と回答した人に、その活動の内容を聴いたところ、「スポーツをする・スポーツを観戦する」が61.9%で最も高く、以下「文化活動をする・伝統文化などを観る」(31.4%)、「語学(英語等)」(25.2%)、「ボランティア活動」(22.9%)の順で並んでいる。

新たに始めたい活動が「ない」と回答した、全体の7割強を占める人たちに、どのようなきっかけがあれば始めてみようと思うか聴いたところ、「スポーツ・文化・ボランティアに関する講座やイベントの開催」(8.8%)、「スポーツ・文化・ボランティア活動や団体の情報提供」(8.3%)、「外国人との交流」(7.1%)がそれぞれ1割弱で、「始めようとは思わない」(68.0%)が7割強を占めて多い結果で、前回までと同じような回答傾向となっている。

(6) 区のスポーツ施設における高齢者免除制度は「現行のまま継続すべき」が、例年同様、4割台半ばで主流

足立区の温水プールやスポーツ施設を高齢者が無料で使用できる制度(高齢者免除制度)については、35.5%が何らかの制度改正を望んでいるものの、これまでと同様に「現行のまま継続すべき」が前回と同率の43.8%で最も高くなっている。

(7) 最近1か月間に読書に関わる行動があった人は8割台半ばで、「新聞を読む」が5割超、「本を読む」が4割台半ばで上位。1割強の“しなかった”人の理由では「忙しいから」が3割強で最も高い

今回の令和2年調査から新たに聴取した、最近1か月間にした読書に関わる行動は、「新聞を読む」が50.5%で最も高く、これに「本を読む」(45.9%)、「雑誌を読む」(39.5%)、「書店・古書店に行く」(30.9%)、「漫画(アニメ)を読む」(30.4%)などが続き、【読書に関わる行動あり】(85.0%)の人が8割台半ばに達している。上位項目を性・年代別にみると、男女ともに「新聞を読む」は高齢層になるほど高く、「漫画(アニメ)を読む」は若年層ほど高く、この2項目で年代差が大きい。一方、「したかったが、できなかった」(2.3%)と「しなかった」(9.9%)は合わせても1割強にとどまり、その理由としては「忙しいから」(33.2%)が最も高くなっている。

7 ビューティフル・ウィンドウズ運動

(1) 「ビューティフル・ウィンドウズ運動」を知っている人が半数近く

足立区独自の犯罪抑止運動である『ビューティフル・ウィンドウズ運動』については、【知っている】（「知っていて、活動を実践している」＋「知っているが、特に何も行っていない」＋「名前は聞いたことはあるが、内容はわからない」）が今回45.8%と、前回より0.8ポイント減少して、ピークだった平成28年調査の47.6%には届かず、依然として地域や性・年代で差がみられる状況が続いている。

なお、「知っていて、活動を実践している」区民は、一部の地域と性・年代層で1割超とやや高めながら、全体では平成22年以降長期にわたって5.0%以下となっている。また、今回も前回までと同様、今後の参加意向が各項目にわたって総じて低めなのを踏まえると、これまで以上に、この取り組みへの認知と理解を広めていくとともに、区民の活動への参加を促進していくことが必要である。

(2) 「花のビュー坊プレート」「ビュー坊のガーデンピック」の認知状況は、依然3割程度

『花のビュー坊プレート』と『ビュー坊のガーデンピック』の認知状況については、「すでに使用している」は2.5%と0.9%で、ともに極めて少数のまま、【知っている】（「すでに使用している」＋「見たことがあり、名称なども知っている」「見たことはあるが、名称などは知らなかった」＋「名称などは知っているが、見たことはない」）でみても、31.3%と26.3%でともに3割前後にとどまり、区民への認知浸透度は依然として低いままとなっている。

(3) 治安が改善していることを「知っている」は4割強

足立区内の刑法犯認知件数がピークだった平成13年と比較して1万件以上減少していることを「知っている」人は42.0%と4割強で、ほぼ同じ設問文であった平成30年（36.0%）と比較すると、6.0ポイント増加している。（設問文に一部変更があったので、平成29年以前との経年比較は行ってない。また前回までの直近2回は“ピーク時と比較して”という質問文で聴取していることに留意）

(4) 居住地域の治安状況が「良い」と感じている人は61.6%で、平成23年以降で最も高い

居住地域の治安状況については、【良い】（「良い」＋「どちらかといえば良い」）が今回61.6%と、前回最高値を更新した58.3%を更に3.3ポイント上回り、区民の体感治安は一定の良好レベルから更に向上している様子が窺える。しかし、治安状況に対する評価には地域によって大きな差がみられるほか、20代の男女では【悪い】との評価も4割前後と多めで、今後も、地域や性別、年代にかかわらずすべての区民が安心して生活できるよう、ビューティフル・ウィンドウズ運動や防犯パトロール等に取り組んでいく必要がある。

治安が【良い】と評価した人のその理由としては、過去7年間の調査結果と同様に「自分を含め、身近で犯罪に巻き込まれた人がいないから」が49.9%で最も高いが、平成25年以降の漸減傾向は続いており、代わりに次点の「防犯カメラが増えたことで、安心感があるから」が、前回よりは3.0ポイント減も、今回も3割強を維持して、経年での漸増傾向を保っている。

また、治安対策として区に力を入れてほしいことについても、「防犯カメラなど防犯設備の設置に対する支援」が今回51.4%と、平成25年以降続けてトップを維持しており、防犯カメラに対する区民の期待は極めて高い。以下「安全に配慮した道路、公園の整備」と「安全・安心パトロールカー（青パト車）による防犯パトロール」もともに4割弱で続き、これまで同様高くなっている。

一方、治安が【悪い】と感じる人のその理由では、今回も「自転車盗難、空き巣など生活に身近な犯罪が多発していると聞いたことがあるから」が51.3%で突出しているが、これまで最も高かった平成29年の61.1%に比べると約10ポイント減少している。

前述したように、居住地域の治安状況が【良い】と評価する区民は6割強まで達して、治安改善への区の取り組みは着実に成果をあげていると考えられるが、治安が【悪い】という人も23.5%と依然2割台半ばみられ、20代の男女を中核に、依然として悪いと評価されている面もある。

(5) 今後の課題

今後も引き続き足立区をより安全安心な街にしていくために、防犯カメラや街路灯の設置促進などの取り組みに力を入れていくとともに、治安向上に資する施策などを通じて、区民の協力も得ながら官民が一緒に力を携えて、足立区を安全安心な街に協創していくことが重要となる。

8 環境・地域活動

- (1) 環境のために心がけていることでは「ごみと資源の分別」が9割弱で依然高いが、7月からのレジ袋有料化の影響から「レジ袋を断る」が20ポイント近く伸長して7割台半ば

環境のために心がけていることでは、「ごみと資源の分別を実行している」が、今回も87.2%と最も高く、平成23年以降各年僅かな増減はあるものの、8割台半ばから9割弱で推移しており、《ごみの分別》が区民の間にはほぼ定着したことがわかる。また、ここ数年5割を超えて次点となっている「マイバッグを使うなどして、不要なレジ袋を断っている」が、7月からの小売店でのレジ袋有料化の影響からか、今回75.9%と、前回より19.4ポイントも増加しており、男性(65.1%)より女性(85.2%)でとくに高くなっている。今回3位の「節電や節水など省エネルギーを心がけている」は46.4%で、平成23年以降のここ10年間の経年でみると漸減傾向にある。

- (2) 9割超の人が「食品ロス」という言葉を知っており、認知者が心がけていることでは「残さず食べる」が8割弱

平成30年から聴取している「食品ロス」という言葉の認知は、「知っている」が90.9%で、前回の87.4%より3.5ポイント増加して、初めて9割を超えており、平成30年では5割程度だった20代男女の認知率もそれぞれ7割、8割を超えるなど、「食品ロス」という言葉が区民に浸透してきている様子がみられる。なお、知っていると回答した人に“食品ロス削減のために心がけていること”を聴いた結果は、「残さず食べるようにしている」が77.6%で最も高く、「外食時に食べられる分だけ注文する」が55.1%で続き、各項目について前回からの大きな変動はみられない。

- (3) この1年間に参加した活動では「区が主催する各種のイベントや催し物」や「町会などのイベントや催し」がコロナ禍の影響で大きく減少も、今後の参加意向では「区が主催する各種のイベントや催し物」がトップをキープ

この1年間に参加した活動をみると、具体的な活動内容としては、ここ数年2割弱で最も高かった「花火大会や光の祭典などの区が主催する各種のイベントや催し物」が、今回11.9%と前回より6.0ポイント減少して次点となり、「自宅の庭や玄関先、または公共の場で、プランターや植木鉢に草花を植えるなど、緑を増やしたり、育てる取り組み」(13.5%)が最も高くなっており、「町会や自治会、老人会、子ども会などのイベントや催し物」(8.8%)も前回より4.9ポイント減少して、前回の3位から5位に後退するなど、コロナ禍の拡大によるイベントや催しの中止を反映した例年とは異なる結果となっており、「特に参加していない」は今回48.1%と、前回より2.6ポイント増加して、平成27年以降は漸増傾向が続いている。

一方、今後の活動への参加意向をみると、「花火大会や光の祭典などの区が主催する各種のイベントや催し物」(20.6%)が2割超で最も高く、これに、“区内の”の表現を割愛して新設扱いの「文化施設や催しで、音楽や芸術の鑑賞または伝統芸能に楽しむ機会」(19.5%)、「自宅の庭や玄関先、または公共の場で、プランターや植木鉢に草花を植えるなど、緑を増やしたり、育てる取り組み」(17.2%)が2割弱で続いているものの、「特にない」(32.0%)と「無回答」(23.8%)が合わせて半数以上を占めるなど、前回の今後の参加意向の結果とほぼ同様の回答傾向が示されている。

9 「孤立ゼロプロジェクト」など

(1) 「孤立ゼロプロジェクト」を「知っている」は2割台後半で、「知らない（初めて聞いた）」が7割強

「孤立ゼロプロジェクト」の認知状況をみると、【知っている】（「知っている、内容も概ね理解している」＋「聞いたことはあるが、内容はわからない」）は今回26.7%で、前回より2.5ポイント減少して、平成25年以降各年3割前後で推移して横ばい状態が続いている。

【知っている】は、地域別では第10地域と第13地域でともに3割台前半とやや高い一方、第4地域では2割強と低めで、性・年代別では男女ともに概ね高齢層ほど高くなる傾向がみられるなど、地域や年代によって認知度に差がみられる。

(2) 「地域包括支援センター」を「知っている」は6割弱

「地域包括支援センター」の認知状況については、【知っている】（「知っている、業務内容も概ね理解している」＋「聞いたことはあるが、詳しくはわからない」）が今回57.7%で、前回の56.3%から1.4ポイント増加して、経年でみると、ここ数年の漸増傾向を維持している。

(3) 高齢者の孤立防止や見守り活動に「協力したい」は約2割

高齢者の孤立防止や見守り活動への協力意向をみると、【協力したい】（「積極的に協力したい」＋「負担にならない範囲で協力してもよい」）は今回19.8%と、前回の18.6%より微増しているものの、経年では平成25年以降各年2割弱で横ばい状態にある。性・年代別でみると、【協力したい】が2割以上に達しているのは、男性の60代と70歳以上及び女性の40代以上の世代で、うち女性の60代は約3割になっている。男性の30代と50代や女性の30代と40代では「協力したいが、時間などに余裕がない」という回答が、それぞれ4割強から5割を占める。

協力意向のある人では、その活動内容として、これまで同様「体調の変化、悩み相談などを伺いながら寄り添う、ちょっとした気づかいの活動」が57.8%と最も高く、これに「『世間話をする頻度』や『困りごとの相談相手』などを調査する活動」が37.0%で続いている。

(4) 「フレイル」予防に大切なことの認知率は5割強で、予防活動の実践率は1割台半ば

今回から聴取した「フレイル」にならないために「運動」「口の健康・栄養」「社会参加」のそれぞれが大切なことの認知状況については、「知っている、活動を実践している」が14.6%で、これに「知っているが、特に何もしていない」（37.1%）を合わせた【知っている】が51.7%と5割強になっており、その認知度は、男性より女性の方が高く、性・年代別では、6割強の男性の70歳以上と7割前後の女性の60代と70歳以上で高い一方、男性の30代と40代や女性の20代と30代ではいずれも3割台で、性差と性・年代差がみられる結果となっている。

(5) 「たんぱく質を多く含む食品」の毎食の摂食状況は「食べている」が8割台半ば

今回から聴取した、たんぱく質を多く含む食品（肉、魚、卵、大豆製品）を毎食1種類以上食べているかの結果は、「食べている」が85.2%を占めて多く、「食べていない」（9.3%）を大きく上回り、性・年代別にも大きな違いはみられない。

(6) 今後の課題

地域包括支援センターの認知度は、漸増傾向を維持して6割弱に達しているものの、孤立ゼロプロジェクトの認知度は、最近4年間は3割に届かずに伸びはみられず、高齢者の孤立防止・見守り活動への協力意向も、平成25年以降2割弱で推移してあまり変化はみられない。

地域福祉を推進する上で、これらの取り組みは極めて重要な役割を果たすものであり、今後も、区民の事業に対する認知度の向上に継続的に強く取り組むとともに、活動への積極的な参加を促進していくことに資する環境の整備や参加へのハードルを下げる工夫などが必要と思われる。

10 協働・協創

(1) 「協創」の認知度は少しずつ増加も、まだ1割台半ば

「協創」について4年目の聴取となる今回、「知っている」は3.8%で、これに「聞いたことはある」(12.3%)を合わせた【知っている】は16.1%で、前回(15.2%)より0.9ポイントと僅かながら増加している。一方、「知らない」は今回81.4%で、前回(81.7%)とほとんど変わらず、今後も引き続き、この考え方について広く区民に周知を図っていくことが必要である。

(2) 「関心はあるが、特に活動していない」が6割弱で、「関心がない」が約2割に増加

全体の約16%に相当する「協創」を知っていると回答した人の協働・協創の実践状況を見ると、今回は、「すでに、活動を実践している」が前回より微減の22.7%、「関心はあるが、特に活動していない」が前回より約7ポイント減の57.6%で、「関心がない」が19.7%と前回(11.9%)より増加しており、“協働・協創に関心あり”の人の割合(80.3%)は前回(88.1%)より減少して、活動を実践している人も微減で、なぜ協働・協創に関する活動のハードルが高く思われているのかを、引き続き検証していく必要がある。

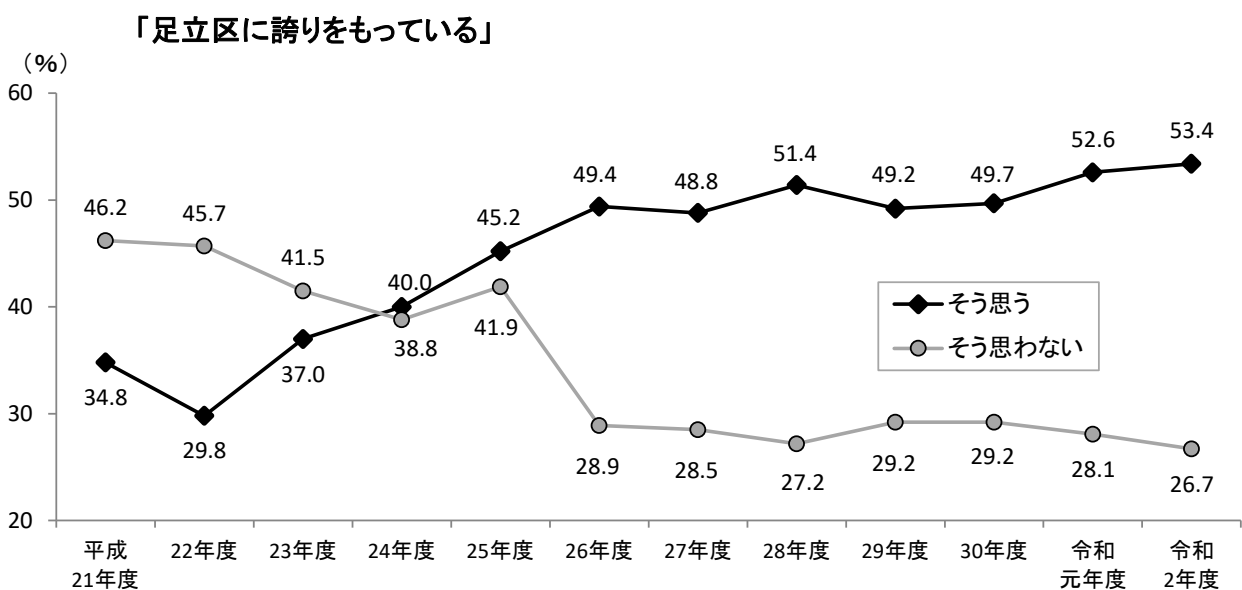
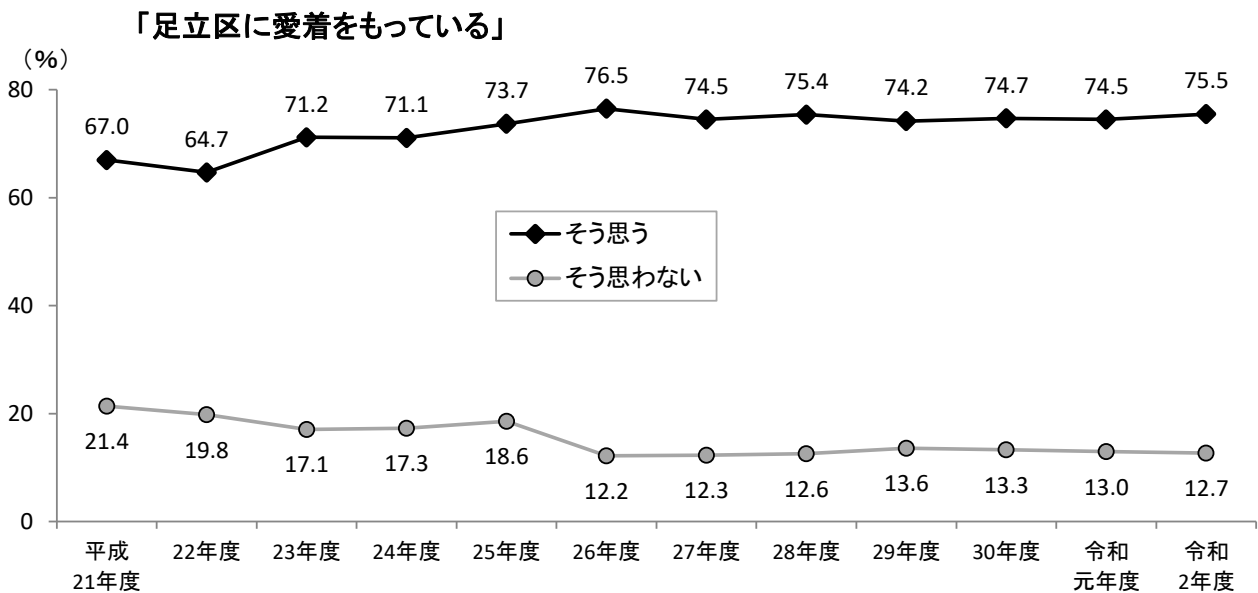
(3) 協働や協創により事業が進んでいると感じている人は年々増えて、今回は2割台半ば

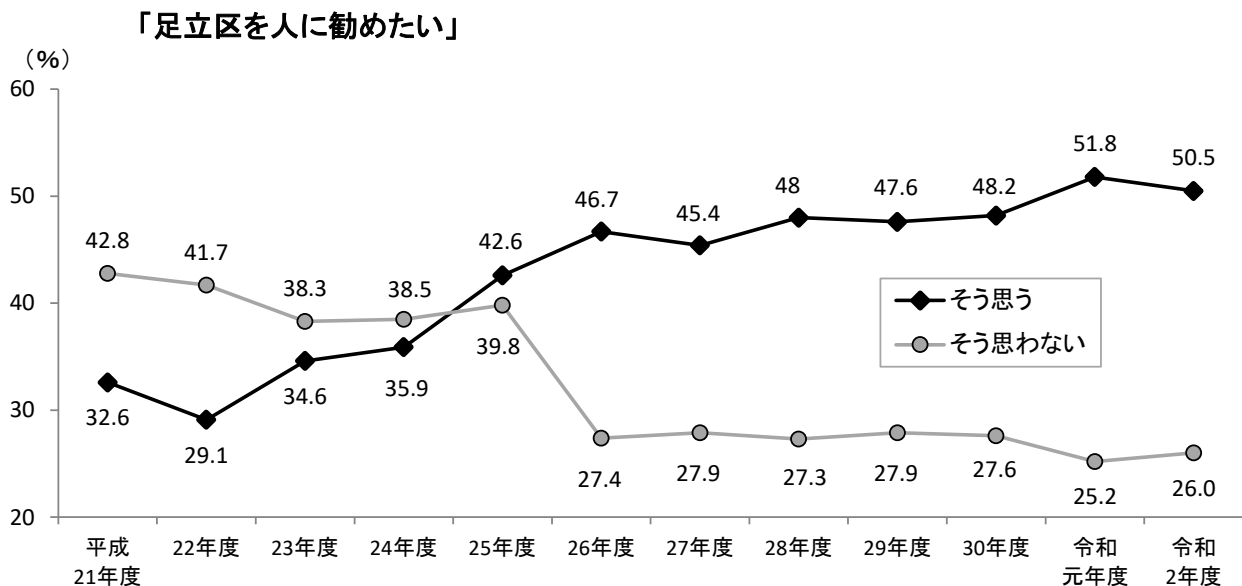
“協働・協創による事業が進んでいると思うか”については、今回、【そう思う】(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」)が24.0%と、前回(22.1%)より1.9ポイント増加して2割台半ばとなり、【そう思わない】(「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」)の17.0%を7.0ポイント上回って、【そう思う】という人の方が多くなっている。ただし、「わからない」という回答も53.8%で依然として5割台半ばと多いことから、協働・協創による事業の内容等を、「わからない」と答えた区民へ具体的に示して可視化することにより、認知を高めていくことが引き続き必要である。

11 区の取り組み

(1) 「足立区に愛着をもっている」と「足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する」がともに7割台後半

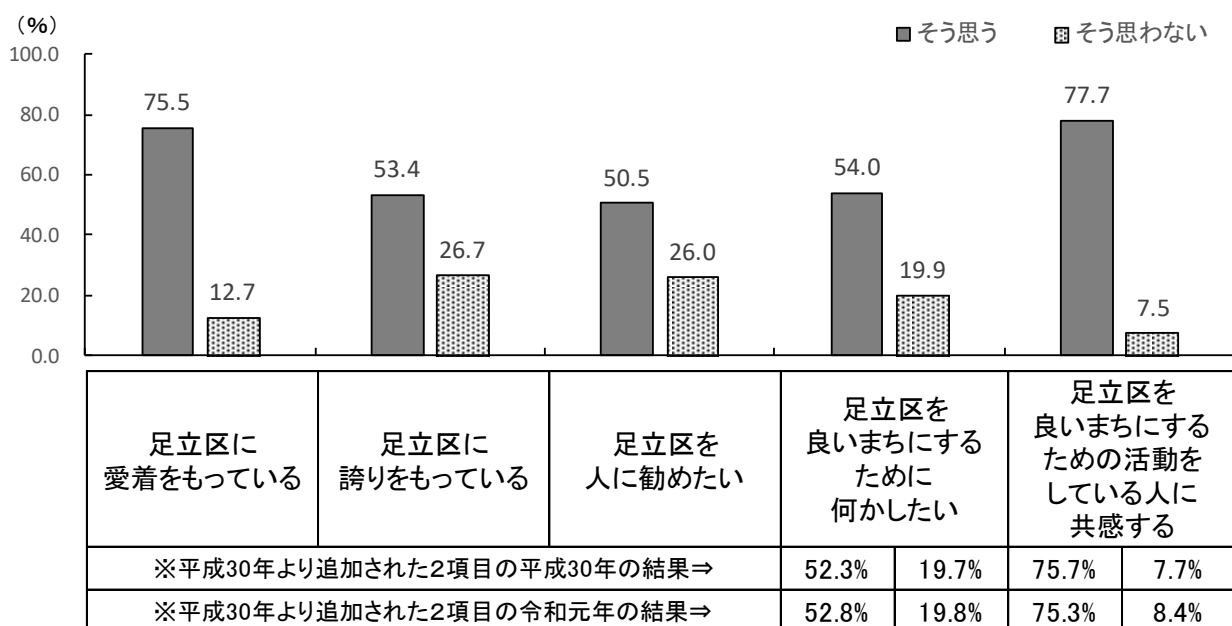
平成21年調査から今回の令和2年調査まで12年にわたって経年で聴取している〈足立区に愛着をもっている〉〈足立区に誇りをもっている〉〈足立区を人に勧めたい〉の3項目について、今回の結果を【**そう思う**】（「**そう思う**」＋「**どちらかといえばそう思う**」）の比率で見ると、〈足立区に愛着をもっている〉は75.5%、〈足立区に誇りをもっている〉は53.4%、〈足立区を人に勧めたい〉は50.5%となっている。今回は、〈足立区に愛着をもっている〉と〈足立区に誇りをもっている〉の2項目が比率を伸ばして、3項目ともに高い水準を維持しており、区に対する愛着や誇りが、区民に広く根付いてきて、さらに醸成されていることを示す結果となっている。





また、前々回の平成30年調査から新たに聴取項目に加えた〈足立区を良いまちにするために何かしたい〉と〈足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する〉の2項目も、【そう思う】がそれぞれ54.0%と77.7%で、ともに前年（52.8%と75.3%）を上回るレベルにあり、前述の3項目に並ぶ高い水準となっている。併せて〈足立区を良いまちにするために何かしたい〉と思っている人は、男性では60代と70歳以上で、女性では30代と40代で、それぞれ6割弱と高めながらも、前回同様、男女ともそれぞれ大きな年代差はみられていない。これらの結果から、“愛着のある足立区をさらに誇りを持てる良いまちにするために何かしたい”と考えている区民が半数以上に達していることは、これまでの区の様々な取り組みと区民や様々な団体、民間事業者の活動が相乗効果を発揮し、一定以上の成果を示している結果の反映ととらえることが出来る。

回答者数(1,746)



平成30年から追加された項目のひとつである〈足立区を良いまちにするために何かしたい〉と、〈足立区に愛着をもっている〉〈足立区に誇りをもっている〉〈足立区を人に勧めたい〉〈足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する〉、および〈区政満足度〉の5項目との関係を、下記のクロス集計表で確認すると、これらの5項目で【**そう思う**】と回答している人では、〈足立区を良いまちにするために何かしたい〉と思う人がそれぞれ多くなっていることがわかる。中でも、〈足立区に誇りをもっている〉〈足立区を人に勧めたい〉〈足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する〉の3項目では、いずれも7割前後と高い水準に達しており、〈足立区に愛着をもっている〉でも6割台半ばにあることから、今後も引き続き、区民が“人に勧めたい”と思う、“誇りや愛着がもてる”ような区にしていくことで、足立区のために活動したいと考える人がさらに増えていくものと推察される。

		足立区を良いまちにするために何かしたい		
		回答者数	そう思う(計)	そう思わない(計)
全 体		1746	54.0	19.9
足立区に愛着をもっている	そう思う(計)	1319	64.6	16.0
	そう思わない(計)	222	32.4	51.4
足立区に誇りをもっている	そう思う(計)	932	70.3	14.4
	そう思わない(計)	466	44.4	38.6
足立区を人に勧めたい	そう思う(計)	882	72.6	14.4
	そう思わない(計)	454	45.8	38.5
足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する	そう思う(計)	1356	67.8	15.3
	そう思わない(計)	131	8.4	87.0
区政満足度	満足(計)	1161	62.4	17.8
	不満(計)	353	45.0	31.4

(%)

- ※ 濃いグレーに白字：全体に比べて10ポイント以上高い
- ※ 薄いグレーに黒字：全体に比べて5ポイント以上高い

(2) 区政全体に対する満足層は、これまでで最高の6割台半ばで、2割の不満層を大きく上回っている

地域の暮らしやすさへの評価や定住意向については、すでに一定のレベルに達して、今回も安定的に推移しており、区政全体に対する満足度も【満足層】（「満足」＋「やや満足」）が66.5%と、現行と同じ聴取方法となった平成25年以降最高だった前回の令和元年（62.1%）を更に4.4ポイント上回る、これまでで最も高い評価を得ている。

なお、今回調査においても、平成28年以降の4年間と同様に、区の各分野への取り組みへの現状評価（満足度）と重要度の関係を数値化（算出方法の詳細は327頁を参照のこと）してみると、足立区の場合、“重要度が平均値より高いが、現状評価（満足度）が平均値より低い”分野、つまり、今後、重点的に取り組む必要のある分野が、「交通対策」「防災対策」「治安対策」「高齢者支援」「行政改革」「学校教育対策」であるとの結果は、前回から「障がい者支援」がこのゾーンから抜けて、「学校教育対策」が新たに加わったのを除くと、平成28年から令和元年の最近4年間とほとんど変わっていない。

しかし、平成29年以降の4年間は、多くの分野において【満足層】（「満足」＋「やや満足」）が、平成28年以前の調査結果を上回っており、「子育て支援」「学校教育対策」「高齢者支援」「低所得者対策」「資源環境対策」「防災対策」「行政改革」などの満足度の高まりが、最近4年間の区政全体への評価の向上につながっていると思われ、とくに今回の令和2年度ではほとんどの項目で【満足層】が前回より更に3.0ポイント以上増加しており、10ポイント前後の大きい伸びをみせた項目も多い。

また、区政全体に対する満足度と、「区への愛着や誇り」、そして「足立区を人に勧めたい」「足立区を良いまちにするために何かしたい」といった区への思いとの間には正の相関も認められる。

(3) 今後の課題

今後も、「交通対策」「防災対策」「治安対策」「高齢者支援」「行政改革」「学校支援対策」などの区の重点的課題の解決に、行政と区民、関係機関が連携し、総合的かつ効果的な取り組みを推進することによって、区民の区政全体への満足度の向上を継続し、足立区を、すべての区民が愛着と誇りをもって、より良いまちにするために何かしたいと思える「まち」に発展させていくことが求められよう。

区に対する気持ち 経年比較／性・年代別

1 足立区に愛着をもっている

全体	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年
	76.5	74.5	75.4	74.2	74.7	74.5	75.5

(%)

男性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年
20代	77.0	82.0	66.7	68.4	74.6	72.5	62.7
30代	77.2	67.3	67.7	74.5	65.1	69.5	80.0
40代	76.6	76.5	74.8	75.7	77.5	71.7	79.3
50代	80.6	73.0	82.1	82.9	76.0	81.6	79.7
60代	76.6	77.7	82.6	69.3	81.4	76.9	77.5
70代以上	85.9	76.0	82.4	81.6	76.9	74.5	77.9

女性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年
20代	67.1	67.5	66.3	72.5	64.9	59.1	66.3
30代	77.6	69.0	66.7	66.9	74.5	73.7	75.0
40代	71.4	75.1	73.5	73.5	71.0	72.0	74.7
50代	68.7	74.7	75.7	74.0	74.7	79.2	73.2
60代	76.9	77.1	73.9	77.3	72.0	80.0	76.1
70代以上	76.5	76.5	80.0	74.6	78.1	73.2	76.6

2 足立区に誇りをもっている

全体	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年
	49.4	48.8	51.4	49.2	49.7	52.6	53.4

(%)

男性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年
20代	44.3	54.1	44.9	36.8	50.8	40.6	45.8
30代	47.5	37.6	47.5	42.9	31.4	42.7	52.9
40代	50.6	48.8	51.9	54.9	51.2	52.5	50.7
50代	50.4	47.6	52.7	57.7	51.9	60.5	54.4
60代	51.5	52.2	59.7	46.0	54.3	58.7	62.0
70代以上	65.9	63.0	68.2	59.9	62.3	62.8	64.2

女性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年
20代	35.4	37.7	33.7	34.8	33.8	40.9	45.7
30代	38.8	40.1	41.5	34.7	41.8	43.2	43.8
40代	42.3	42.8	42.7	47.1	36.6	43.9	50.0
50代	38.1	39.9	45.1	41.6	48.8	51.0	48.0
60代	50.0	51.4	50.3	58.2	44.8	54.2	47.2
70代以上	57.3	57.7	60.0	55.5	63.9	57.3	61.1

3 足立区を人に勧めたい

全体	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年
	46.7	45.4	48.0	47.6	48.2	51.8	50.5

(%)

男性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年
20代	62.3	44.3	43.6	42.1	59.3	46.4	42.4
30代	49.5	36.6	48.5	49.0	47.7	62.2	68.6
40代	49.4	51.2	55.6	56.9	51.9	55.0	52.7
50代	48.2	49.2	50.9	52.0	53.5	57.8	51.3
60代	46.1	48.9	54.2	38.0	50.4	49.6	54.3
70代以上	55.1	54.0	59.1	55.3	53.8	53.2	58.3

女性	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年
20代	39.2	32.5	41.6	43.5	36.4	43.9	46.7
30代	42.5	41.5	40.0	42.4	48.2	53.4	50.9
40代	43.9	41.3	42.7	47.6	37.2	52.2	52.4
50代	40.3	39.9	47.9	42.2	47.5	55.0	43.0
60代	42.9	45.7	43.0	53.2	44.8	49.2	38.7
70代以上	46.3	50.0	49.0	47.3	49.8	45.1	52.3

4 足立区を良いまちにするために何かしたい

全体	平成 30年	令和 元年	令和 2年
	52.3	52.8	54.0

(%)

男性	平成 30年	令和 元年	令和 2年
20代	45.8	39.1	44.1
30代	52.3	56.1	57.1
40代	60.5	57.5	54.0
50代	57.4	58.5	57.0
60代	46.5	47.9	58.1
70代以上	53.8	56.9	59.8

女性	平成 30年	令和 元年	令和 2年
20代	41.6	39.4	41.3
30代	54.5	51.7	58.0
40代	52.5	63.7	58.4
50代	52.5	60.4	53.6
60代	59.4	45.8	49.3
70代以上	48.5	45.1	49.8

5 足立区を良いまちにするための活動をしている人に共感する

全体	平成 30年	令和 元年	令和 2年
	75.7	75.3	77.7

(%)

男性	平成 30年	令和 元年	令和 2年
20代	64.4	59.4	67.8
30代	76.7	79.3	82.9
40代	76.7	80.0	75.3
50代	78.3	80.3	77.2
60代	75.2	72.7	76.7
70代以上	74.5	72.9	80.9

女性	平成 30年	令和 元年	令和 2年
20代	61.0	66.7	66.3
30代	79.1	71.2	81.3
40代	80.3	80.3	84.3
50代	79.0	83.2	77.7
60代	82.5	75.0	81.7
70代以上	71.7	72.8	74.1

区政満足度の分析 経年比較／暮らしやすさ／定住意向／情報の入手／治安

全体	平成 26年	27年	28年	29年	30年	令和 元年	令和 2年	(%)
満足	53.2	53.3	57.7	61.5	60.0	62.1	66.5	
不満足	27.6	27.4	25.6	24.0	23.9	21.8	20.2	

1 地域の暮らしやすさと区政満足度

	満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
暮らしやすい	4.6	17.5	2.2	0.3	3.0
どちらかといえば暮らしやすい	2.5	33.9	9.5	1.4	7.3
どちらかといえば暮らしにくい	0.3	6.4	4.4	1.4	1.7
暮らしにくい	0.0	0.4	0.3	0.6	0.5

2 定住意向と区政満足度

	満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
ずっと住みたい	3.7	20.4	4.0	0.8	5.8
当分は住みたい	2.9	27.9	7.6	1.2	4.0
区外に転出したい	0.1	2.8	1.3	0.9	0.5
わからない	0.7	6.4	3.4	0.9	2.5

3 必要な時に必要とする区の情報の入手状況と区政満足度

	満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
十分に得られている	1.0	2.0	0.1	0.1	0.5
ある程度得られている	5.7	45.6	10.3	1.7	6.9
得られないことが多い	0.2	4.7	2.9	0.7	1.9
まったく得られない	0.2	0.7	0.4	0.3	0.5
必要と思ったことがない	0.2	3.4	1.6	0.3	1.1
区の情報に関心がない	0.2	1.8	0.7	0.6	1.0

4 居住地域の治安状況と区政満足度

	満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
良い	2.1	5.3	0.5	0.1	1.1
どちらかといえば良い	4.0	35.0	6.8	1.0	5.7
どちらかといえば悪い	0.9	11.1	5.3	1.1	1.8
悪い	0.0	0.9	1.1	1.0	0.3
わからない	0.4	6.1	2.6	0.7	2.9

